

(別紙2)

審査結果の要旨

氏名 林 義強

本論文は、清朝最末期にあたる20世紀初頭、日本留学ないし亡命の経験を持つ中国知識人を主たる担い手として生じた国学運動に関する包括的な研究である。国学運動に関与した人々は、一方で西洋学術の広範な流入に対して文化的に危機感を抱き、中国の伝統学術を国学として再編成することによってこれに対抗することを試み、他方では西洋列強の中国侵略に対して政治的に危機感を抱き、満洲族の支配王朝である清朝を打倒して漢民族の主体性を回復すべきことを主張した。その意味で国学運動は、20世紀初頭に急速に昂揚する中国ナショナリズム運動の重要な構成要素の1つであり、本論文は、国学運動の主要な論点の分析を通して、中国ナショナリズムの特色の解明を目指すものである。

本論文は3部に分けられ、全12章からなる。「清末国学の成立」と題された第1部では、知識人たちの危機意識が国学運動という1つの運動に収斂していく過程を具体的事実をもとに明らかにしている。「清末国学における『民族』」と題された第2部では、国学運動を支える民族意識の成立過程が分析される。すなわち、まず古代以来の華夷意識の歴史的変遷の過程を詳細に説明したのち、国学運動の中心的指導者であった章炳麟の排満意識の成立過程を、彼の詩を注意深く読み解くことを通して明らかにしている。「清末国学における『文化』」と題された第3部では、清末国学の主要な論点を取り上げ、文化的ナショナリズムの担い手としての彼らの言説の特質の解明が試みられる。清末国学は、民族的アイデンティティを成立させるための不可欠の要件として歴史と言語を挙げていたから、第3部では、国学運動に関与した思想家たちの歴史観と言語観がとりわけ重点的に分析されている。

これまで、国学運動に関与した個々の思想家に対する研究は少なからず存在したが、本論文のように国学運動の思想的性格の包括的解明を試みた研究はきわめて少なく、本論文は近代中国思想史研究への重要な貢献である。明治日本の国粹主義が国学運動に与えた影響の分析など、日本留学の成果も十分に生かしており、章炳麟の詩を注意深く分析することで、彼の排満意識の成立時期についても従来の説と異なる新たな見解を提示している。さらに、国学運動家たちの歴史観について、中国人の起源をめぐる様々な議論の分析を行なった点や、言語観について、白話や方言や 에스ペラント語を視野に入れた分析を行なった点など、多くの点で創見が見られる。

他方で、本論文には幾つかの問題がある。本論文の目的からすれば、ほんらい予備的役割しか持たない華夷意識の歴史的変遷の叙述に多くのページを割き、他方で最も重要な国学家たちの言語観の分析が相対的に手薄になっているのは、最も重大な欠点である。また、国学運動を生み出した重要な要因である西洋学術の流入状況の分析や、国学運動家たちの最大の論敵である梁啓超の分析も、不十分である。

しかしながら、国学運動に関与した思想家の文章は、章炳麟がまさにそうであるように、同時代で最も難解な文章として知られ、それらの資料に果敢に挑戦し、広い視野から1個の意味ある思想史像を構成したことは、本論文の著者が自立して研究を行なうのに十分な能力を有することを証明している。よって審査委員会は、博士(文学)の学位を授与するのが適当であると判断した。